広島市立大学 広報誌 『west breeze』

W.B.

2019-03 No.79

学生による分かりやすい研究紹介

広島市立大学ではさまざまな研究を行っています。その中から教員の研究3つ、学生の研究1つについて学生が取材をしました。各学部の学生が取材をすることで、その研究内容をより「分かりやすい」言葉で紹介してもらいました。

平和とは何か ―根本から問う平和研究を

研究者：広島平和研究所／孫 賢鎮准教授　取材：情報科学部2年／丸 照正さん

国際法や朝鮮半島、北朝鮮問題を専門に研究している広島平和研究所の孫准教授にお話を伺いました。

北朝鮮には、核・ミサイル開発問題、拉致・離散家族の問題、北朝鮮の人権の問題などがあると話した孫先生。特に、朝鮮戦争後からこれまで北朝鮮により拉致され、現在北朝鮮にいる韓国の拉致被害者が500人以上いたり、韓国国内に13万人以上の離散家族がいるなど、知らないことが本当に多かったです。

また、核問題については、現在の北朝鮮が保有している核をどうするのか、北朝鮮の内部にある核施設はどうするのか、核関連の技術者や各施設で働く労働者とその家族はどうなるのかなど、北朝鮮の非核化プロセスについて研究されています。

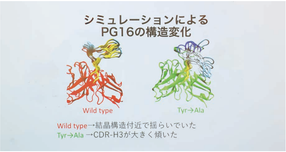
孫先生は北朝鮮のタイムリーな情報を得て研究をするために、毎朝、北朝鮮の労働新聞や朝鮮中央通信をチェックし、また韓国の政府機関・研究所などからも情報を得ているとのことでした。

北朝鮮の非核化プロセスについては、短期間でどうにかなるものではなく、完全な非核化が成し遂げられるまでには最低でも5～10年はかかると見られています。孫先生はこの問題について研究しつつ、朝鮮半島の安全保障、さらに、北東アジアの地域安全保障体制構築についても研究していきたいとのことです。

広島の地で学ぶ学生として、あらためて「平和とは何か」について考えるいい機会になりました。

コンピュータでHIVワクチンの開発を目指して

研究者：情報科学研究科／鷹野 優教授　取材：情報科学部4年／森重 玲生さん



情報科学研究科バイオ情報学研究室の鷹野先生に、ご自身の研究についてお話を伺いました。今回お話を伺った研究は、タンパク質の仕組みを解き明かし、HIVワクチンの開発を目指すというものです。一見、情報科学とは関係のない研究のように見えますが、生物学や医学は情報科学と強い関わりがあります。

では、具体的に情報科学とどのような関係があるのでしょうか。この研究では、数万から数百万の原子が化学結合して構成されるタンパク質を分析するため、原子と化学結合をそれぞれ、電気を持つ玉とバネに見立て、コンピュータ上でシミュレーションを行っています。そうすることで原子一つ一つの動きや、さらに、タンパク質の構造変化・運動を調べることができるのです。

さらに、タンパク質と病気、タンパク質と薬には大きな関係があり、同じように情報科学を用いてタンパク質の仕組みを解き明かすことで、HIVワクチンの開発を目指し、そのほかにも新しいタンパク質・薬剤のデザインを行っているそうです。

広島山水

研究者：芸術学研究科（博士後期課程）魏 双斌さん　取材：芸術学部2年／原 彰吾さん

今回取材したのは、中国からの留学生で芸術学研究科（博士後期課程）の魏双斌さんです。

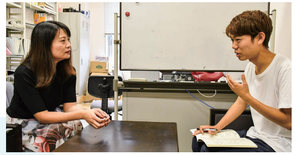
魏さんは中国と日本の社会現象や過去の歴史、現在の社会問題などをテーマとして積極的に取り上げ、日本と中国を取り巻く現象をモチーフに制作しています。中国山水画の表現手法を取り込んだ独自の手法で木や陶器を用い、「立体山水」を作り上げます。

2011年に研究生として来日し、2013年に博士前期課程に進学されました。その後ドイツのハノーバー専科大学に交換留学生として1年間留学されました。日本に戻ってからは広島だけでなく東京でも個展を開催し、現在は博士後期課程の修了に向けて広島の風景と山水の研究をされています。

貿易業にも興味を持ち、企業間での商談において自分の考えが生かせるのではないかと日本の企業に就職を決められました。アートとビジネスは、アイデアとコンセプトが一番大切という点で似ていると魏さんは言います。また、プロデュースする側になって、社会に影響を与える作品の展開に携わりたいとのことです。

中国人のメンツ意識～消費行動との関係とは～

研究者：国際学部／李 玲凌教授　取材：国際学部2年／神津 圭佑さん



マーケティング論が専門の李玲凌教授に中国人のメンツ意識と消費行動との関わりについて話を聞きました。中国人が欧米の高級ブランドを消費する行動の背景にはメンツ意識という概念が強く結びついています。メンツとは体面や面目などの意味があり、メンツを立てる、つぶすという例で使われます。

中国人のメンツ意識のルーツは坊下の戦いの後、敗走した項羽が新たな地で王になるのを断り自害したところまでさかのぼります。今では自分および家族、または会社の上司のメンツを立てるためにブランドが消費されるというのです。例えば、皆が持っている特定のブランドを自分が所有していないと自分のメンツが立ちません。バッグや時計、車など、相手のレベルに見合った物を贈らないと相手のメンツがつぶれてしまいます。興味深いことに、この消費行動は高所得者層だけでなく、低所得者層にも該当するといいます。お金のない人は借金をしてでもブランド品を消費するというのです。消費されるブランドは主にSNSを通じて全国に認知されるものであり、それは認知度が高いものほどメンツを立てるために利用されるからです。

このように李玲凌准教授の研究により爆買いをはじめとする中国人の消費行動の背景が理解できるでしょう。

事例でみる市大の地域貢献

「科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学」を建学の基本理念としている本学は、広島市の公立大学として、地域と共生し、市民の誇りとなる大学を目指しています。ここでは、本学の地域貢献活動の事例を紹介します。

尾道プロジェクト

文部科学省による「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の一環として広島市立大学芸術学部のデザイン工芸学科現代表現領域が中心となり、尾道市立大学、アーティスト・イン・レジデンス・プログラムのAIR ONOMICHIと協働し開催しているアートプロジェクトです。2019年に開催したプロジェクトでは、歴史の記録を意味する「くろにくる（＝chronicle）」の否定形の造語「あんくろにくる」と、その状況をポジティブなものと捉える意味で「ニューしてぃー（new city）」と組み合わせ、「あんくろにくるニューしてぃー」というテーマのもと、制作と展示を行いました。尾道の地域性に注目しながら、人口減少や高齢化、空き家などの厳しい状況を悲観するだけではなく、ポジティブにとらえることで、その中に埋もれてしまっている新たな価値を見つけ出すことを意図しています。普段の課題とは違い、実際の社会問題について考えたり、学外の専門家と交流しながら制作したことは、学生にとって実践的な経験を得る貴重な機会でした。現在、2020年2月に開催予定の第3回の企画と展示作品の制作を行っています。

いちだいプログラミング教室

学生が自主的に計画・実施する「市大生チャレンジ事業」として行った「いちだいプログラミング教室」は、学生主体で小学生から高校生までを対象にした地域貢献活動です。教材から広報まで全て学生が担当しています。主に、CやPython、ハードウェアとしてRaspberry PiやIchigoJamの言語を用いてプログラミングを学んでいます。昨年度は、「Pythonでお絵描きプログラミング」、「Pythonでシンプルなゲームを作ろう」、「IchigoJamを用いたBASICプログラミング」、「SenseHatを使う」の4つのテーマで開講しました。

「Pythonでシンプルなゲームを作ろう」では、もぐらたたきを題材に画面に表示される3x3のマスに対応したテンキーを押すことで実現するゲームを作成し、「IchigoJamを用いたBASICプログラミング」ではプログラミング専用子供パソコンであるIchigoJamを用いてBASICの文法や処理を学びました。

また、安田女子中学高等学校と連携して講義を行ったり、いちだいプログラミング教室の活動をポスター発表したりと、外に向けた活動も行っています。

プログラミング自体初めての参加者も多く、一から自分で考えた作品やプログラムを作る体験を通して科学技術の難しさや楽しさを知るきっかけになったと考えています。

広島平和研究所「英語による市民講座」

2020年1～2月、広島平和研究所は5回目となる「英語による市民講座」をサテライト・キャンパスにて開講します。この市民講座では、平和研究所や所外からの研究者たちが、平和に関するさまざまな問題をテーマに講義を行います。これまでの市民講座で扱ったテーマには、ミャンマーの政治変動、米国におけるヒロシマについての認識、核の脅威の歴史、日本の市民による韓国人被爆者支援活動、グローバル政治とメディア、平和構築における国家の役割、アメリカ音楽における冷戦の表象、マーシャル諸島に関する国際司法裁判所の司法判断、グローバルな高レベル放射性廃棄物の地層処分計画などがあります。本講座の聴講者は、高校生・大学生、研究者、ジャーナリストなど、多様な市民の方たちで、各回の講座の後半には講演者とのディスカッションの時間も設けています。多様でグローバルなテーマを英語でお届けするこの「英語による市民講座」は、日本語で開講される「連続市民講座」や国際シンポジウムと並び、本研究所の目玉行事です。

8.6 ピースナイター

今年の8月6日は、連日の猛暑もいくぶんか和らいだ日となりました。この日、広島東洋カープによる「ピースナイター 2019」が行われました。平和記念日に開催される「ピースナイター」では、2011年よりカープ球団の協力を得て、カープおよび対戦チームの監督、コーチ、選手がメッセージを書いたとうろうを本学の学生が受け取り、原爆ドーム付近の元安川で行われる「とうろう流し」で流す行事を続けています。

今年のピースナイターでも試合前のセレモニーにおいて、カープとこの日の対戦チームであるベイスターズの代表選手から、本学の学生がとうろうを受け取りました。その後は例年と同様、両チームの監督・コーチ・選手の平和への祈りを乗せたとうろうを、学生たちがとうろう流しの会場へと運び、元安川へ流しました。

＜表紙写真＞
「広島市の河川環境の魅力をリバーツーリングをとおして体験する」

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の地域課題演習で、太田川にてスタンドアップパドルボード（SUP）を体験している様子。COC+の地域課題演習は「SETOUCHIの海の魅力を見つけよう」など6つのテーマで構成され、「広島市の河川環境の魅力をリバーツーリングをとおして体験する」はそのうちの一つ。

3つのひかり　未来をつくる
広島市立大学
Hiroshima City University

丁寧に
一人ひとりを大事に
社会との関わりの中で
学生を育てます

〒731-3194 広島市安佐南区大塚東三丁目4番1号
TEL:082-830-1500（代）　FAX:082-830-1656
http://www.hiroshima-cu.ac.jp/

Hiroshima City University

活躍する市大人

在学生、卒業生を問わず、国内外のさまざまな分野で活躍する「市大人」を紹介します。

市大で学んだこと

東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻2年　山﨑 雅子（やまざき わかこ）さん（芸術学部美術学科彫刻専攻2017年度卒業）

本学の芸術学部を卒業後、東京藝術大学大学院に進学され、作品制作や展示を行っている山﨑さんに本学での学びについてお話を伺いました。

―美術や創作に興味を持ったのはいつでしょうか。

小さい頃からきれいなものや洋服に興味がありました。それがきっかけで美術系高校への進学を決めました。さまざまな専攻がある中で彫刻を学ぼうと思ったきっかけは、粘土でパプリカを模刻したことです。張りのあるパプリカを粘土でどのようにつくればいいのか試行錯誤を重ねながら夢中になってつくりました。高校3年生の時、国立国際美術館でみたマリノ・マリーニの作品に感動し、これからこんな作品をつくりたいと強く思ったことを覚えています。

―広島市立大学を志望した理由は？

市大に通われていた高校の先輩にこの大学の話を聞き、オープンキャンパスに訪れました。美術を学べる美大は沢山ありますが、地元は京都なので、自然に囲まれた広島というまだ知らない土地で、学びに集中したいと思い志望しました。また、美術高校というある意味特殊な環境で育ったので、国際学部、情報科学部、芸術学部があり、領域横断的な授業をしている市大に強い憧れを持ったことも理由の一つです。実際にさまざまな学部の人たちと関わる機会があり、いい経験になったと思います。

―広島市立大学での思い出を教えてください。

作品展示風景

大学1年のときに参加した「仙養ヶ原シンポジウム2014」というプロジェクトがとても印象に残っています。およそ2週間の間、広島市立大学の彫刻専攻とデザイン工芸学科の先生、学生が仙養ヶ原に滞在、制作します。私は、3人のチームを組んでアメートル近い竹を使用した大作をつくったのですが、もちろん竹を採る経験なんて初めてで、先生方や地元の方々に協力してもらいながら取り組みました。

展示会場は開放的な野外空間で、空間に負けない存在感を出すにはどうすればよいのか考え続けた2週間はとても良い思い出です。また、先生方や他専攻の学生とも毎日同じ食卓を囲むことで、自然と打ち解け、和やかでありながらもお互いを高め合える刺激的な時間を過ごせました。

―課題に取り組む上で心がけていたことはありますか。

気になった展示にはできるだけ足を運ぶように心がけていました。手を動かして作品をつくることも大事ですが、作品を鑑賞することも同じくらい大事だと思っています。少しでも多くの作品をみて視野を広げることを心がけていました。

また、実際に作家活動をされている先生方や、先輩のお手伝いをすることも大事だと気付いたのは、1、2年生のときに「対馬アートファンタジア」というアーティスト・イン・レジデンス・プログラムで作家の制作補助をしたときです。作家として、作品制作に向かう強い意志と苦労を間近で感じることができました。

―現在の活動について教えてください。

作品展示風景

現在は、東京藝術大学大学院に進学し制作を続けています。これまでさまざまな素材で作品を制作してきましたが、一貫して「人が立っている」という根本的な衝動を大切にしてきました。人がそこに立っているという緊張感や存在感をどうすれば表現できるのか、日々模索しています。そして先月行った銀座ギャラリー「せいほう」での展示では、“ひとがた”を11体制作し構成しました。人が複数佇いることで生まれる関係性や距離感について、私なりに考えた作品です。また今回の作品から、顔にスパンコールを組み合わせる手法を取り入れました。

現在は、修了展に向けて準備を行っています。

―課題や作品制作で行き詰まったときのリフレッシュ法などはありますか。

ギャラリーや美術館に足を運んでさまざまなジャンルの作品をみます。最近では、東京国立博物館の東洋館を訪れた際に、面白い形の石仏をみてドキドキしました。どうしてこんな気持ちになるのだろうと考えたり、私の作品をみた人に同じような感動を与えられたらいいなあと思うと、希望が持てて制作に戻れます。

―最後に後輩たちへメッセージをお願いします。

私は、市大を卒業してから少し後悔している事があります。それは整った留学制度があるにも関わらず、留学をしなかったことです。友人や先輩が留学から戻ってひと回りもふた回りも成長していることを目の当たりにし羨ましく思っていました。英語に自信が持てなかったり、海外で生活することへの不安はあるかもしれませんが、思い切って学生のときにしか得られない機会を積極的に利用することで、広い視野を持って自分の特性を生かす方法を見つけられるのかな、と思います。

山﨑雅子（やまざき・わかこ）
広島市立大学芸術学部美術学科彫刻専攻2017年度卒業。
東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻在学中。

留学体験記

本学では海外学術交流協定大学との活発な交流・学生交換留学を推進しています。

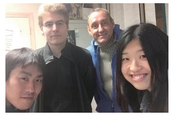
フランス・レンヌ第2大学
（海外学術交流協定大学への学生派遣）

自分から取りに行く留学

国際学部国際学科4年　水野（みずの） 椋太（りょうた）

レンヌ第2大学では語学学校のCIREFEでの授業はもちろん、大学内できさまざまな活動が行われており、各種スポーツクラブや構内での映画の上映会、日本とフランス人との交流会、大学の寮でもゲーム大会、ダンス大会などなど自分がやろうと思えばいろんな活動が開けた場だったと思います。しかし正直言ってフランスに着いた当初の自分は来たこと自体に満足してしまい、日々の生活に手いっぱいで自分から行動することをおろそかにしていたと思います。私の場合はその長い留学期間の中で、もっとこうしなければならない、こういう事をしようと気付くことができ、日本語クラブや日本語の授業のアシスタント、演劇クラブへの加入など積極的に動き、何とか実りある留学生活にできました。

留学のような長期間にわたる挑戦では、途中で疲れてしまったり、何のために来たのかを忘れてしまうことがあるかと思います。しかしほとんどの場合、成長というものは一瞬の特別な経験から起こるものではなく、習慣と化した行動から起こるものです。留学という場は特別な経験を習慣で行えないと、工取りの貴重な場で、留学に来たことだけで満足せずそこで何ができるのかを考えるのが大事であったと思います。このことは何も留学のような特別な場だけでなく、普通に学生生活を送っている今も同じで、自分が成長するために、日々をだら過ごすのではなく行動して習慣にしていくことが重要だと感じました。


日本語クラブにて（左下が水野さん）

マレーシア科学大学
（海外学術交流協定大学への学生派遣）

「伝えたい」で壁を越える、自分を超える

情報科学部医用情報科学科3年　岩部（いわべ） なな（なな）せ

私は幼い頃から人見知りで、英語が得意な訳でもありませんでした。しかし、高校時代の先生の影響でずっと留学したいと思っていたので、「長期留学の機会があれば、絶対に逃さない」と心に決めていました。そのため、今回の募集を見て、迷わず申し込み、市大初の派遣留学生としてマレーシア科学大学（USM）で勉強しました。

マレーシアを選んだのは、異なる背景や価値観を持つ人々が共存する国で生活し、その文化に触れてみたいと思ったからです。マレーシアには、私の拙い英語でも一生懸命伝えようとすると、真剣に聞いてくれる人がたくさんいました。会ったばかりの人でも、何度かすれ違えばもう顔なじみになれる程の親しみやすさには何度も助けられました。そんな温かい人たちと関わる中で、もっといろんな話をして仲良くなりたい、せっかく新たな価値観や考え方を学べる場所にいるのに、失敗を恐れてばかりいるのはもったいないと、思いました。また、コミュニケーションにおける最大の障壁は「できない」という気持ちであり、「伝えたい」という気持ちを持って勇撃に話せば、うまく話せなくても、時間がかかっても、相手に伝わるのだとわかりました。

自信がなく、不安も多々ありましたが、だからこそ絶対に悔いの残らないように、留学中はやりたいことはとにかくやってみると決め、いろいろな事に挑戦しました。マレー語を学び、マレーシアならではの行事に参加し、さまざまな人との出会いにも恵まれました。自分の成長を実感したり、自分の新たな一面を発見したりと充実した1年を過ごしたことで、自分に自信が持てるようになりました。

皆さんも自分の可能性を試してみませんか。

先生と勉強会（右が岩部さん）

学生リポート

この記事は、「学生広報サポーター」に登録している市大生自らが取材をして執筆しました。

パキスタンの現場から人権と教育を考える

国際学部国際学科2年　三雑（みざつ） 穂菜美（ほなみ）

10月10日（木）と11日（金）の3限目に全学共通系科目「平和と人権B」の講義の一環で、国際協力NGO“HOPE87”のパキスタン支部代表のショアイブ・ハイダー氏とアマアド・アッバス氏を講師としてお招きした特別講義が行われました。学部、学年を問わず多くの学生が聴講しました。

10月10日に行われた特別講義では、人権と教育をテーマにパキスタンの教育の事例を交えながら、教育とは何か、そして教育と人権の関係についてお話しされました。

パキスタンの教育現場で使用される教科書の挿絵には、外で働く女性の絵があまり載ってwell-ます、男性が外で働いている絵が圧倒的に多いといいます。こういった教科書の挿絵は、外で働くのは男性であり、女性は家庭の中にいるべきだというメッセージを発し、女性への偏見や差別を助長しているといいます。そして女性への偏見や差別は、女性の社会参加や民主的権利の行使を制限し、最終的に紛争などにつながってしまうというハイダー氏の話から、正しい教育は人権を守るが、排他的なものには差別を助長し、人権の侵害につながってしまうという教育の二面性と教育の質の重要性が伺えました。

また、アッバス氏は“HOPE87”の活動では広島で被爆して亡くなった佐々木禎子さんの話を翻訳してパキスタンの教育現場で教材として使用し、子どもたちが本を読む習慣をつけることや平和の大切さを学ぶことにつながっているとお話しされました。

このほかにも、ライブ配信では講義の中で聴講している学生たちに、教育とは何か問いかけ、意見を募りました。学生たちから出る意見はさまざまで、教育や人権について講義参加者全体で考えるきっかけとなりました。

講義の様子（中央がハイダー氏、右が通訳の小泉氏）

オープンキャンパス特集

本学では、高校生や保護者、高校の先生方を対象としたオープンキャンパスを年３回開催しています。
ここでは、６月16日、８月４日、10月14日に実施した今年度のオープンキャンパスについて、それぞれの特徴や見どころを紹介します。
（来年度以降の詳細は、本学ウェブサイト等で随時お知らせします。）

6/16 プレ・オープンキャンパス
いちだい進学準備編

本学の受験を考えている高校３年生とその保護者、高校の先生方を対象としたオープンキャンパスです。施設の見学はもちろん、大学の紹介および入試説明、過去問の公開のほか、入試や進路、学生生活などについて質問ができる個別相談会を実施しました。

8/4 オープンキャンパス
いちだい徹底研究編

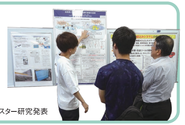
本学に関心を持っている高校生に広島市立大学のすべてを紹介するメインのオープンキャンパスです。クラブ紹介、ミニ講義、学内ツアー、各学部の学生による個別相談コーナーなど、盛りだくさんのイベントで来学者をお迎えしました。

各学部コーナー紹介　＼各学部さまざまなコーナーの中から一部をご紹介！／

英語ミニ講義

この講義では、本学で開発された英語eラーニングプログラムを利用した授業「CALL英語集中」と国際学部の専門科目「通訳技法論」を公開し、コンピュータを活用した英語授業を体験してもらいました。
このほか、eラーニングシステムの体験も用意しました。

学生実験・研究室紹介


ポスター研究発表

情報科学部では、３年次に行う実験を紹介し、研究室紹介では、研究内容を研究室所属の学生・教員が紹介しました。このほか、体験型の学生実験・研究紹介も行いました。

デザイン工芸学科染織造形専攻の学生の課題展示

学科・専攻紹介

芸術学部の各学科・専攻の紹介です。
学生の作品の展示やデモンストレーションを行い、芸術学部棟のアトリエや工房なども見学してもらいました。

経験者が語る海外留学の発表会の様子

ライブキャンパス 10/14
素顔のいちだい編

大学についてのイメージを持ってもらえるよう、実際に大学で行われている授業を90分まるまる受講してもらうライブキャンパスを開催しました。
高校１、２年生を主な対象とし、大学でどんなことをするのか気になる方、市大への進学を考えている方、各専攻などを詳しく知りたい方に特におすすめのイベントです。

おめでとうございます

■本学大学院における博士学位取得者（2019年度秋季修了）

氏名（敬称略）	学　位
西本　匡志	博士（情報工学）

■本学大学院で認められた論文博士学位取得者

氏名（敬称略）	学　位
鷲沢　敦子	博士（学術）

■芸術学研究科の学生らが第5回石本正日本画大賞展で受賞
2019年8月、芸術学研究科（博士前期課程）1年の吉村織部さんが「凛大賞　第二席」、芸術学部4年の福光逸也さんが「石正美術館長賞」を受賞。

■情報科学研究科の柾鳥康平さんの論文が「ICICIC2019」で受賞
2019年8月、情報科学研究科（博士前期課程）2年の柾鳥康平さんの論文が「Best Paper Award」を受賞。

■再興第104回院展で芸術学部前田准教授が受賞、同研究科の明壁美幸さんが入選
2019年9月、前田力准教授が日本美術院賞を受賞、芸術学研究科（博士前期課程）1年の明壁美幸さんが入選。

■情報科学研究科の黒田明日香さんが情報科学技術フォーラムで受賞
2019年9月、情報科学研究科（博士前期課程）1年の黒田明日香さんがFIT奨励賞を受賞。

市大ニュース

■2019年度特待生が決定
2019年6月、学部2～4年生の各年次から、国際学部3人ずつ、情報科学部5人ずつ、芸術学部2人ずつ、計30人の学生が選ばれました。特待生制度では、成績優秀で、かつ他の学生の模範となる学生を表彰。副賞として奨学金が贈られます。

■情報科学部の学生がセキュリティ・キャンプ全国大会に選抜
2019年8月、情報科学部情報工学科2年の河野雄也さんが、セキュリティ・キャンプ全国大会2019の参加者に選抜されました。

■超高密度気象観測・情報提供サービスPOTEKAの運用を開始
有限会社アガリシステムサービスと情報科学研究科田村慶一教授の共同研究の一環として、本学体育館入口横に超高密度気象観測・情報提供サービスPOTEKAの気象計を設置し、観測点「広島市立大学」を開設しました。観測している気象データは、POTEKA　NETのホームページからどなたでも閲覧することができ、気温はもとより風向・日射・雨量などの天気の状況をリアルタイムで把握できます。

■芸術学部笠原教授による夏休み親子体験教室を開催
2019年8月、広島リビング新聞社との共催で「夏休みに親子で体験2019～こども未来はっけん大学」を開催しました。当日は、26組56名（大人26名、小学生30名）が参加され、「回るアニメーション！「のぞき絵」制作」と題して、小学生が保護者と一緒に、16コマの絵を描いて、自分だけのアニメーションづくりに挑戦しました。

■国際学部の学生が長崎原爆犠牲者慰霊の会で被爆体験を伝える紙芝居を上演
2019年8月9日、広島で開催された長崎原爆犠牲者慰霊の会において、国際学部3年の牧野英里さんが長崎の被爆者（吉田勝二さん）の体験を伝えるデジタル紙芝居の読み手を務めました。

■情報科学研究科脳田講師による夏休み親子VR（バーチャルリアリティ）体験教室を開催
2019年8月にピアサポート子育て相談センターとの共催で「子どもたちに夢と希望を！プロジェクト（高所体感VR&歩行体感VR）」を開催しました。39名（保護者18名、中学生5名、小学生9名、園児7名）が参加され、脳田講師が「VRの現状と未来」のテーマで講話後、ライドマシンと歩行装置による高所コースターやマルチプレイVRを親子で体験しました。

■学生顕彰の授賞式を実施
2019年9月、2019年度上期の学生顕彰を受賞した情報科学研究科（博士前期課程）1年の黒田明日香さんの授賞式が行われました。黒田さんは、情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア（CVIM）研究会の卒論セッションにおいて、優秀賞を受賞した功績が認められました。

■学長奨励賞の授賞式を行いました
2019年9月、2019年上期の学長奨励賞を受賞した情報科学部4年川本祐士さんの授賞式が行われました。本学には、学力および人物が優秀で、他の学生の模範となる学生を表彰する特待生制度がありますが、川本さんは3年連続で特待生として選出された功績が認められ、学長奨励賞の受賞となりました。

■外部資金の獲得
本学の教員は、国の制度である科学研究費補助金や民間の各種財団からの助成金などを受けて、独創的・先駆的な研究に取り組んでいます。

●2019年度科学研究費補助金採択状況<研究科目別>

研究種目名	件数	計
基盤研究（A）一般	1	11,830千円
基盤研究（B）一般	5	24,310千円
基盤研究（C）一般	50	65,910千円
若手研究（B）	3	3,770千円
若手研究	6	6,660千円
研究活動スタート支援	3	3,220千円
合計	68	115,700千円

●2018年度受託研究費・共同研究費・助成金・補助金・奨学寄附金

区分	件数	金額
受託研究費・共同研究費	58	98,034千円
補助金	2	46,526千円
奨学寄附金	12	14,184千円
合計	72	158,744千円

この本　～教員の著書紹介～

国際学部 柿木伸之 教授
「ヴァルター・ベンヤミン――聞を歩く批評」
2019年9月、岩波書店

「WEST BREEZE」へのご意見・ご感想を募集します

広島市立大学　広報委員会
○E-mail:kikaku@m.hiroshima-cu.ac.jp
○Tel:082-830-1666　○Fax:082-830-1656
WEST BREEZEのバックナンバーは、大学ウェブサイト「大学紹介」>「大学広報」>「広報誌「WEST BREEZE」」に掲載しています。

広報誌名
広島市立大学広報誌の表紙タイル「W.B.」（「WEST BREEZE」の略称）は、広島市立大学のある西風新都にちなんで命名されました。
編集・発行／広島市立大学 広報委員会
発行日／2019年12月1日